

無料体験版——海賊のサザンクロス

Captain's view 0

今回のクルーズにゲストとして乗船することになった六人には、各々、分厚い個人情報ファイルがつくられていた。

——いつものようにだ。

パイプをくわえ、その一冊を読み耽っていた私の前に、幸子が自分のめくっていたファイルをやや乱暴に投げ置いた。

ラタン製のテーブルには、積み重なったファイルの山の他に、ココナッツジュースや果物を入れた器が並んでいたが、それらが振動で音を立てるほどだった。

開放している窓から清潔な海風が静かに流れこんでくる。

「六人を？」と幸子が尋ねた。「同時に一週間で？」

「ちがう」私は首を横に振った。「同時に、五日間で、だ」

両手を広げる幸子。やれやれと言いたいらしい。道楽には付き合えない、そういう表情である。

「どうして？ もう何年も成功してきたじゃないか。私が敗北したことはない。そうだろう」

私は窓の外の景色を眺める。

水平線まで続く南洋の海——美しい。

その手前の湾に広がるヨットハーバー——美しい。

停泊する様々なクラスのヨット達——美しい。

ひときわ目を引く帆船型クルーザー——巨艇だ。そして美しい。

エスペランサは三代目になる。

初代はあれのほぼ半分のトン数だった。勝利を重ねるにつれ『彼女』もまたグラマラスになっていったのだ。

「そりゃね。今回は弁護士やニュースキャスターや医者といった食わせ者はいないから、そのぶんはこれまでより扱いやすいだろうけどさ。でも六人——六人だよ六人。しかもそのうち三人が男ときた。いくらなんだって自信過剰も過ぎやしないか」

まくしたてる幸子に、私は再び首を横に振る。

「ちがう。食わせ者はいないかもしれないが扱いやすい相手とは言えない」

私の手が私の座っているチェアの隣で直立不動の姿勢を保っている遠田ねねのヒップを撫で回した。かつて食わせ者だった女弁護士はいまやピンストラップのガーター付きテディという娼婦の黒装束を身につけて、鈍く輝く素肌を惜しげもなく晒す女になっている。

「三人とも強敵だろう。ガッツがあり体力もある」
ねねのヒップはガーターから溢れ出るほどの肉量をつけていた。掌に貼りついてくる感触は熟れており爛れている。

「六人のうち三人が男であるのもその通りだが、だからといって厳しい闘いになるとは限らない。男が弱点になることはこれまでも実践済みである」

内腿に手をさしこんだ時、指先に触れてくる陰毛は剛毛で大量だ。シェイブを繰り返し、そのつど育毛剤によって回復させてきたせいで、最初の倍は濃くなった。毛深いほうがこのクソ女には似合っている。

「私こそ私の自信になど無関心だよ。重要なのはタスクを克服した瞬間のエクスタシーだけ。これこそトライするに値する褒賞だ。人生を賭けても惜しくない至高の快楽なのさ」

幸子は聞き飽きたという顔をして真っ赤なサクランボを一房、自分の口に押しこんだ。

ねねに向かってこっちへ来いと合図をする。

腰を90度に折り、幸子へ顔を差しだす女弁護士。

ティの胸の縁が大きくたわみ、双乳が垂れ出そうになる。黒めの乳輪まで覗けている。

幸子は彼女に大口を開けさせ、その中へサクランボの種を噴射した。

「あんたのゲームはとてつもなく大掛かりだから、言っ

てるのさ。たしかに身入りも大きいけど——」

『褒賞』のひとつである遠田ねねは、現在、昼は弁護士としてブラック企業数社から顧問料を受けとる地位におり、夜は高級コールガールとして金持ちから接待料を稼いでいる。勿論そのほぼ全額が搾取され、万田家の銀行口座に振り込まれていた。

「——出費もかさむからねえ。ヨットはでかくなっ
し、島は買っちゃうし」

私は屈んだため突きだす格好になったねねの丸々と成熟した双臀を平手打ちする。まだ気鋭の法律家であった頃の下半身とは別人の如き変貌を遂げていた。とくに尻頬と両腿に囲まれた、磯巾着を連想させる軟体の女陰こそ、使用感丸出しの淫乱さに腫れているのだった。

「正確には買ったのではなく開発の許可を取得したということだな」

「同じこった！」と幸子は苛々した気分を憂さ張らしするようにねねの耳を抓りあげる。

「心配はいらん。強敵といえども所詮人間だ。還元していけば、人間とは弱さの集合体であるにすぎない。ならば、分析して何らかの解を導きだせぬはずがなかろう。例えば——」

私はファイルを右手でめくる。左手で摘んだサクランボをねねのアヌスへ押し当てた。艶々した大粒の紅をオリーブ色に沈んだ括約筋の中央へ突き入れていく。柔らか

な果肉が潰れる懸念はなかった。この助平女のそこは自らの力で大きく吹き広げる訓練を受けている。男根の何分の一しかない直径のサクランボの一つや二つ、呑みこめぬわけがなかった。あんのじょう長いヘタだけを外に出して果球をすべて直腸の出口に吸いこんだ。

「このクロデメキンは珍しくスポーツ選手だが現役を引退した今でも、世界的アスリートのフィジカルを維持していると思われる。ひょっとするとお前よりも腕っ節が強いかもしれん。脚部は完全に上回っているだろう。逆境に打ち勝つ精神力はジュニアユースの頃から培われていると思われる」

「その目のギョロツとした牝猫？ 気の強そうなアバタ面がこの副船長様より強いって？ ハ！ そんな糞ガキ、片手で刺身にしてやるよ！」

数年前、まさに幸子に刺身にされたねねの女陰へ、皮を剥いていないフィリピン産のバナナを挿入してやる。

「最初からのレスリング勝負はつまらん趣向だ。ロジックのある展開から導きだされる勝利でなければカタルシスは高まらない。弱点探しも案外たのしい作業だよ。想像してみたまえ。美しく仕上げられた筋肉質の身体や小麦色の表情を。ワクワクするだろう」

つけこんだねねの弱点は何だっけ？

司法試験に優秀な成績で合格した才媛は、弁護士になってからは主に社会問題事案を引き受ける理想家肌だった

はず。

ちょっと思いだせない。不倫ネタだったか、家族の不始末だったか、そんなところだろうか。

私はバナナをスラストさせ始める。

「ふん、まあねえ。こっちのデカパイチビだったら弱点も一目瞭然だけれどもねえ」

自分が投げ捨てたファイルを指さす幸子。タンクトップが申し訳程度に引っかかっている肩から腕にかけて、小型ヘラクレスの異名を付けられるにふさわしい隆々ぶりだ。

デカパイチビもクロデメキンと等しく人妻だったが混血である。韓国と日本のハイブリッド。これが『弱点』にならずして何ができる——平均的大衆である幸子はそう言いたいのだろう。たしかにそれは妄想を刺戟される出自だ。刺身だけでなく様々な料理法が考えられる素材である。

「でもこっちはどうなんだい。弱点なんて本当に見つかるのかい。このオカメインコは！」

結婚する前の職業が国際線旅客機の客室乗務員だったところから幸子はさっさとそのゲストをそう渾名していた。今回のシリーズ中、最も美人であるという事実には幸子特有の逆恨みを混ぜてもいた。でなければセキセイインコでも良かったわけだから。

ざっとファイルに目を通しただけでは、美人であるだけ

でなくそのオカメインコには攻略の突破口となりそうな瑕疵は見当たらなかった。

「これは久美子の例に似ているかもしれないな」

私は平松久美子の名を口にする。いまだに第一線のニュースキャスターとして報道番組のヒロインを続けている彼女。しかしその実態は遠田ねね同様、破格のメディア出演料を我々に上納し、コールガールの務めも従順にこなす稼ぎ頭だ。彼女のところに集まる政治的経済的裏情報は幾度か我が口座へ莫大な振込をもたらす起点になってくれもした。

その久美子もなかなか弱点の見つからない女だったが、結局のところ瑕疵がないわけがないし、万が一なかったなら論理的に作り出してしまえばいいだけのことだ。

私のヒストリーに失敗などないのである。

オカメインコも久美子の軌跡を追うことになるろう。

「どうだかね」幸子は笑いだす。「久美子の時はうまく行ったけどさ。亭主をどう天ぷらに揚げるか、そこが問題って言ってるんだよ。久美子の時は一人だったけど今回は三人だ。天ぷら油だってそう多くは使えないんだよ」

私はバナナを手放した。ねねの膣奥深くまで挿入されたそれは、硬く『握り』締められてちっとも落ちる素振りを見せなかった。

「そのままサクランボのヘタを千切ってみなさい。バナ

ナのは剥いた経験があったな？ 蟹股になることを許可する。同時にトライしろ」

「正確には、剥いたんじゃないよ。こそいだのさ。芋洗いみたいに」

両手を広げてニタリと頬笑む幸子。

丸裸となり中腰の蟹股をつくって腰をカクカクと曲げ、尻を振りたくり始めるねね。

すぐに汗びっしょりとなるがその汗を散り飛ばすほど弾力的で過酷な下半身の運動をする。

「何だっけ？ そうそう——夫の処理方法——」

私はチェアの背にもたれ、パイプをくゆらせた。

幸子は何かを言いたそうだったが私は無視した。

妻といえども遮ってはいけないと表情で諭した。

ゲームの初手に熟考する。

これに勝る豊潤な時間の過ごし方はない。

官能と至福の始まりである。

プロローグ

オレンジ色の光線を咆哮のように放射しながら、南国の落陽が大海原の水平線に没した途端、木の葉のようなディンギー（小型ボート）は、赤道気候の華やかな色彩か

ら無響の暗黒色のなかへ吸いこまれていった。

幸いなことに、北マリアナ諸島の八月は台風さえなければ、海は穏やかな波間を人類に与えてくれる。三人乗りのディンギーであっても、転覆を心配するような海況にはなかった。

ただし、それには定員を上回る四人——男一人と女三人——が身体を寄せ合いながら乗って、さらにもう三人——男ばかり——が海中にいて、船の縁を両手でつかみ、立ち泳ぎの格好で随伴しているという現実、やはり異常事態の結果を物語っているに決まっている。

「・・・暗いわ・・・何も見えない・・・」

震えるような声が一人の口から漏れた。

「恐いのは当然ですよ奥さん！　何も恥ずかしがることではない」

逞しい肺胞と強靱な精神力から発せられた言葉は、船上の中央部に座り、舳先に背を向けて、二本のオールをゆっくりと旋回させ続けている男のものであった。

「しかし、何も見えないというのは事実ではありません。いや逆に、このタイミングで夜を迎えた我々は本当に運が良かったというしかない。ほら、空を見上げてご覧なさい！」

おそらく彼を含めた七人全員が視線を上空へ向けただろう。

絶句するほどの数の星が夜空に散りばめられていた。

透明な大気をもつ遠洋の海上だからこそその満天の星雲だ。

「たしかに皆さんはGPSも六分儀もないとおっしゃるかもしれない。しばらくは救援の手が及ぶことも期待薄かもしれない。しかし皆さんにはこの万田がいる！ 私にとってこの星空こそ地図であり海図だ。これさえ目に出来れば、方位を特定し、進むべき方角を確定できる。喜んでくださってもいい。私の昼間の勘は正しかったようですぞ。我々の取った進行方向に狂いはなかった。このぶんなら潮流を利用してこのままディンギーを進ませ、およそあと一時間後にはX島へ辿り着けるでしょう！」

天然のプラネタリウムの壮大な闇と、響き渡るその男の怪気炎に、他の六人はただ圧倒されて息を飲むばかり。ほんの一時間前、乗船していた大型クルーザー帆船が武装海賊に襲撃され、命からがらこの小舟を救命ボートにして逃げだし、見渡す限りの絶海の中、漂流を続けているという、この身に起こった信じがたい厄難を呆然と反芻するしかなかった。

Captain's view 1

夕食はまるで夢のようなひとときであった。

この三組のバカップル達にとっては、だ。
私の提案で後甲板につくられた食卓に六人の男女が座っている。
それぞれカジュアルな服装だったが、品のいいブランドばかりであり、雰囲気は損ねることはなかった。
日本列島沿岸ならば、真夏でも夜の海上はかなり冷えこむものだが、南洋のこの海域ではその心配もない。風も波も凪ぎ、上着を羽織る必要もない。
おかげで女達の露出した肌を堪能することが出来るのだった。

クルーズ初日を記念しての船長主催のディナーが始まった。

「プラネタリウムのようなわ！」
のちに私のマxコ奴隷となる——決定事項だ——メス豚達の第一声は、私の正面に座っているクソ女があげた。
三井奈々子は満天の空を見あげて驚嘆した。
このクルージングに参加し、最初の夜を迎えたゲストは必ずそう叫ぶことになっている。
もちろん天球儀の真ん中にあるような星空がエスペランサ3世号を包んでいるのはたしかだった。
「素晴らしい！」

ノースリーブ水着の妻の肩を抱きながら、もうすぐその最愛の人を略奪されるとも知らない哀れな夫も、連続して賞賛した。

マストの最上部にとりつけられていた白熱灯が消され、辺りは一瞬だが暗闇が支配した。

月光を反射して揺らめいている濃紺の海面が浮かびあがる。

それはきらめきを乱舞させている星々の競演をよりファンタスティックにする。

おっちょこちょいの都会人はこの手の演出にイチコロだった。

他の四人も上を向き放しなのだ。

「カシオペア座は・・・見えないってわけよね？」

キャミソール型のサマーワンピースを大柄なプロポーションにまとったバカ女が言った。

肩紐のかかる日焼けした剥きだしの両肩は頑丈そうな幅を持っている。

槌谷綾音の夫は初老の入り口の年齢だ。

「そうだよ。ここは南半球なんだからね」

私は困ったような笑顔を作った。

「地図上では北半球ということになります。海図的には南半球ですがね」

「海図的？」

「そうです奥さん。ここら辺りの船乗り達は北極星では

なく南十字星を使って航路を測定していたのです。大航海時代ですな。サイパンは地図上では北半球にありますが、緯度が低いためにちゃんと南十字星も観測できるのです。つまり今我々が目にしているのは、北半球の星々と南半球の星々とが混在した天空ということになる。じつに贅沢な驚異の大パノラマではありませんか！」

「そうだなあ」彼女と腕を腕を組む夫。「北だの南だの、ボーダーラインを引くのは人間の都合だからねえ。大宇宙はそんなこと、お構いなしさ。もちろん大海原もだ」

利いた風な口を叩くこいつも、ショートヘアで目の大きな美人妻を守ることはできないのだ。丸裸に剥かれ、私の足元に跪かされ、私の睨丸へ自ら進んで鼻面を押しつける恋女房を、どんな気持ちで眺めるのだろうか。

「北半球の星も南半球の星も同時に見える？ 道理でこの星の量——」

三人目のザコ女は半袖のブラウスを着ていた。前のボタンの上から二つを外していた。

見上げれば見上げるほど、彼女の黒髪は腰から甲板へ届きそうになる。

胸のボタンが弾かれそうだ。若々しいバストが、まるで私へ捧げるように突きだされている。

「簡単に流れ星に出会えそうだな」と眼鏡をかけた夫が言った。

「そう、私も今、そう思った」

堀部秀美は相槌を打ち、二人は楽しそうに笑いあう。

この夫婦にとって互いの屈託のない笑顔を見るのは今晚が最後だろう。今度夫が出会うボイン妻の笑みは、私の射精を体内に受けて感動に咽び泣きながら浮かべる肉悦の微笑なのである。お前の精液ではなくて。

「ちなみに南十字星はあの辺りです」と、私は天空を指さした。

「皆、あの星を——正確には星座を——頼りにしていたのです。人工衛星から情報をえられる時代になった今の船乗りたちでさえ、ときおり、あれにセキスタント（六分儀）の標準をあわせて、コースをたしかめている。なぜなら機械は人の子であり、壊れも狂いもするが、星は神の恵みであって、決して人間を裏切りはしないからです」

私は『今回も』つかえずに自分の蘊蓄を語れたことに満足気にうなずいた。

幸子とねねが食事を運んできた。

私はテーブルにランプを置く。

マッチを擦って火を灯す。

くもったガラスが凸レンズの役目をはたし、ほのかな光源となって、食卓の上をゆったりと照らした。

「60年代の西独製です。オイルの匂いはすぐに大海原へ流れていきますので」

厳選された銀器に盛りつけられたフランス料理は新鮮な海の幸ばかりを素材にしていた。

エスペランサ3世号の料理長の腕は、このゴクツブシどもに食わせるのも惜しい、一流ホテルのシェフ並みである。

「どうです？ 彼女のファンになりたくなかったですよ
う」

私は赤ワインのグラスを口に運びながら言った。

「握手会の予定があれば教えてください。どんなに長い列だってちゃんと並びますよ」

槌谷綾音の夫はムール貝のムニュエルに舌つつみをうちながら軽口を叩いた。

「すべて海産物で、素材を生かすよう工夫しております」と幸子。「お口にあれば嬉しいですわ」

六人は会話を中断し、フォークとナイフをあやつっている。

そう、どんどん食えば良い。

これは一種の別れの杯だ。

明日からお前達が食うのは、枯れ枝の節に潜んでいる芋虫であり、磯の浅瀬にへばりついているフジツボの類いだ。ヤシの葉や岩の凹みに溜まったスコールの雨水だけが飲み物だ。

——やがてデザートに氷菓と珈琲が出される。

ようやく一心地ついた六人は会話を思いだした。

「昔の夜はみんなこうだったのでしょいうな」と、ホストの私が口火を切った。

「光などは足元を照らす程度でじゅうぶんなのかも知れません。こうした暗闇の中で、シェークスピアはハムレットを、モーツアルトはフィガロの結婚を、それぞれ生み出したのです。おそらく味覚も現代人よりは鋭かったのでしょう。目隠しをすると他の五感が研ぎ澄まされますから。なので料理人の腕も鍛えられて優秀だった。文明の進歩が思索の結果だとしたら、現代文明はゴロゴロと奈落の底に向かって転がり落ちているのかもしれないぞ。だってそうでしょう。思索のほとんどは夜に営まれてきたのに、現代の夜は狼の生息地のように急速に面積を縮小させているではありませんか。現代文明の煌々たる１００ワットが発見したものは・・・そうですね・・・部屋の隅に転がっている一円玉くらいですかな」

クスクスと笑いだす三組の夫妻。

ディナーの流れを壊さぬように、知的好奇心を刺激する自己紹介を兼ねた談笑のテーマを、ユーモアを交えて提示してやったわけだが、これには連中の知能程度を計りにかける誘導とともに、万田船長の知識と知性を『本格デビュー』させる役目を含めてもいる。

とくに人妻達の中で、誰がどんな反応を示すか、興味深いところだった。

「そうですね、船長——」

デザートをまだ放置したまま、ワイングラスを片手で保ち、美しい声を静かに放ったのは三井奈々子であった。きっとこいつだと思っていた。

肩へ垂れるセミロングの黒髪が、匂い立つ白肌に流れ、大人の女の色香を扇いでいるこいつ。

均整のとれたプロポーションを、乗船するや否や着替えて水着に包むほど、行動的でインデペンデントなこのクソ女こそ、私の仕掛けた釣り針に一番に食いついてくると思っていた。

「——そうですね、船長。旅客機で地球を一周すると——私は以前CAでした——夜の部分に光り輝いて見えるのはアメリカのラスベガスと日本列島ですからね。我々の祖国は、狼よりも早く絶滅するかもしれませんわ」

祖国への辛辣な批評は、わが国の一部知識人のよく気取る、マゾヒスティックな態度であるが、この女の政治的スタンスが垣間見えるようだ。私は一般的な意味で『文明』という言葉を選択したにすぎないのに、いつのまにか矛先を日本限定にすり替えている。

ただしその切り返し方はそこそこ知的であり、そこそこ抱擁力があつた。

それに自分の意見をストレートに公言する度胸こそ——
旅の最中の解放感にガードが下がっているとしても——
私の昂揚を妖しく誘うエネルギーに満ちている。

「絶滅というより退化かな」

セパレート水着から堂々とあらわにしている小股の切れ
上がった美脚を組み替えるクソ女。

グラスを近づけていく唇はルージュが乗っていないのに
艶々として赤味を帯びている。

そういえば全員が素っぴんだったがどれも容色の衰えぬ
上玉ばかりだ。

「船長は——」幸子が上手いタイミングで合いの手を入
れる。「——こういうパーティトークが大好きなんで
すの。日頃私みたいなガサツな人間としか付き合わない
ので、ディベートの腕が鈍ってしまうなんて言うんです
よ。まあ憎らしい。皆さんで少し、お灸を据えてやって
くださいな」

和やかな笑い声がテーブルを包みこむ。

幸子の演技力に騙されてリラックスした六人はより口が
滑らかになった。

沽券を発揮しようとする男どもが主導的に見解を言い合
ったが、どれも興味を引かない駄論ばかりであった。こ
いつらを雄奴隷にするには五日すら必要ないと確信す
る。

しかし三人の女はなかなか油断のならない頭脳を持って

いるようである。

アイスクリームを山盛りにすくったスプーンを、勢いよく口に運んでいた槌谷綾音は、妻達の中では最年長者であるのに、その童顔や明るい声のせいで、しばしば十代に見えることがある。

「でも船長。衰えたものばかりではありませんよ。進歩したものもある」

「ほう、それは为什么呢」

「女性は一明らかに進歩しているでしょう。メンタルでもフィジカルでも」

「なるほど。フィジカルでもそうですか」

「ええ。私は現役時代——プロテニスプレーヤーでした。今はコーチです——世界ランク最高28位でしたが、100年前の男子世界チャンピオンには勝てる自信がありますよ。ヴィーナス姉妹やシャラポアならもっと確実でしょう。船長のお考えになる文明の中に、スポーツが入っていればの話ですが」

「いやいや、もちろん入っておりますとも！ 私もヨットマンの端くれです。スポーツに偏見などございませんぞ。肉体運動によるゲームも、突き詰めていけば思索の積み重ねの結果でありますからな。たしかにこれは進歩と言えますな」

三井奈々子に比べれば学歴や教養という面で見劣りするかもしれないが、この女には行動力があり成功体験があ

り、何よりポジティブなのが強みである。オカメインコはインテリ特有のペシミスティックな部分が必ず弱点となるはずだ。

勝ち方を知っている人間は侮れない。

ただ一人、堀部秀美だけがこのパーティトークに積極的とは言えなかった。

星を見上げている時間のほうが長いくらいである。

私の情報収集ミッションに感づいた？

まさか。しかし何らかの悪印象を本能的に嗅ぎ付けたのかもしれない。

この万田船長の実相をだ。

もちろんまだ第六感が働いているだけで、言葉にできるような明瞭な不安ではないのだろうが、油断できないところである。

私はゲスト六人の視線が通わない瞬間を選んで幸子と目配せをした。

さすが副船長。

彼女も同じ感想を持ったようで、警戒の視線を返してきた。

特別な対処が必要になってくるかもしれない。

「如何ですか、珈琲のお替わりは？」

さりげなく話をデカパイチビに振る私。

フレンチメイド服姿のねねがすかさずザコ女のマグカップに茶色の液体を注いでいく。

「カフェインの香りは進歩も退化もないようですが？」
さらに自分へ向けてくるホストの笑顔に、堀部秀美もようやくパーティのエチケットを守る気になったようだ。

「私の名前は秀美と書いて（ヒデミ）というのですが、この漢字は韓国では（スミ）と発音するのです。やはり女性の名前に使われます。あっ、言い忘れていましたが私は日本人と韓国人のハーフなのです」

唐突だったが、とくに肩を怒らせているわけでもなく、ごく自然なカミングアウトであった。

それでもテーブルの周囲には薄氷が張る手前の緊張感が漂った。夫の雄馬だけは微笑を浮かべている。

「秀美って一昔前の日本ならアイドルの名前として使われるくらいだったけど、最近では奈々子や綾音にも遠く及ばないB級ランクですよねえ。二十代にしてはそうとう芋っぽいと言わざるをえない」

笑っていいものかどうか、微妙な顔つきになるゲスト達。

「でも幸子よりはハイカラではありませんの」と副船長が口を挟んだ。

想定内の反応なのらしく、デカパイチビは満面に笑みをたたえる。

「いえいえ、幸子には王道のポテンシャルがあるから不滅ですけど、秀美にはそこまでの実績も貫禄もない。暗澹とした将来と言わざるをえない」

綾音がたまらず吹きだした。

「では韓国の秀美（スミ）はどうかというと、これまた日本でいえば『花子さん』の扱いです。現代では親達が自分の娘に付ける名前としては敬遠されまくっている。最近ではB級グルメの商品名として登場したのが大健闘かな。名付けて『スミチップ』！ 韓国産ポテトチップです。つまりそのものズバリの『芋ねえちゃん』ってわけですね」

どうやら笑った方がいいところだと察したが、今度はタイミングを逃して苦笑に終始してまうゲスト。

「それ、売れたの？」

奈々子が尋ねれば秀美は両手を大きく広げる。

「バカ売れ！ 今では韓国でポテトチップスといえばスミチップスのことですよ」

「つまり両国で大衆に愛されている名前とも言える」
私は頷きながら彼女の言わんとするところを慮り、言葉を紡いだ。

「その通りです、船長。ソウルでも東京でも——夫の仕事の関係で両方を行き来しています——私は結構『芋ねえちゃん』として親しまれています。ひょっとするとこれは進歩ではないかと思うこともあります。文明的な意味で」

それはそうだと賛同するオカメインコとクロデメキン。

素晴らしい。

堀部秀美の知性もかなり高い。ジョークを使いながら自分の出自をさらりと紹介した。両国の歴史の暗部を大衆の活力溢れる日常生活を繋げることで見事に乗り越えている。若いのに大したものではないか。

三人とも万田船長のチxポ奴隷ハーレムに加えるのにふさわしい逸材だ。

勝利者たる唯一の雄が複数の高級牝を所有する。

文明の帰趨に関わらず、それが大自然の摂理というものである。

彼らは明日からその現実をじっくりと味わうことになる。

1. 炎上する帆船

サイパン島ガラパンに本拠を置く、旅行代理店『南彩帆航洋企画』が主宰する四日間の近海クルーズに応募した三組の日本人夫婦こそ、ディンギーにしがみついているその六人達であった。

『南彩帆航洋企画』の代表取締役を務める万田は、同時

にクルージングの主演である大型ヨット『エスペランサ 3 世号』のベテラン船長である。

巨大かつ尖麗な帆を持つエスペランサ 3 世号は、万田の妻である幸子副船長と「ねね」と呼ばれるメイド役の女性を乗組員として、総勢九人をその流線型の船体に悠々と収容し、二日前、サイパンのヨットハーバーを出航したのだった。

三井（ミツイ）夫妻は東京からの旅行者である。

夫の崇史（タカフミ・37 歳）は番組制作会社に所属する有能な映像プロデューサーであった。小柄で眼鏡をかけたやや風采の上がらない感じはあるが、物腰やユーモアは抱擁力に富み、優秀な都会人の気質をうかがわせた。

妻の奈々子（ナナコ・29 歳）は元国際線の客室乗務員というだけあって、制服映えする細身のプロポーションに上品な微笑の似合う容貌を兼備していた。英語も不自由なく使いこなす才媛であるとともに、泳ぎも得意でクルージングの途中には何度か甲板から、日焼けさせるには罪悪感すら覚える暖色系の白肌をワンピースの水着に包み、肩まである黒髪をスイミングキャップに閉じこめ、直接海へ飛びこんで、他の乗客や乗組員を驚かせる行動力を持ってもいるのだった。

今回は崇史の仕事仲間の紹介により応募してきたらし

い。夏のバカンスの一環であるとともに、彼の仕事の口ケハンの意味も少しはあるということだった。

槌谷（ツチタニ）夫妻は名古屋から来ている。

地元で名門テニスクラブを経営している夫・浩一（コウイチ・51歳）は自らはテニスの経験がなく、クラブは親から引き継いだものだ。しかし経営手腕はなかなかのもので、東京や大阪にも直営クラブをもつほどの成功を収めていた。妻の綾音（アヤネ・32歳）こそ元選手であって、一昨年現役を引退するまでWTAのポイントを保持していた強豪であった。現在でもレッスン・コーチとしてコートに立ち、時には若手プロと遜色なく打ち合うのが日課である。クラブの繁盛の一端は、この『実力派美人先生』にもあるわけだ。現役時代は精悍なプレーヤーの表情のみを演出していた清潔なショートヘアも、クリクリとした大きな瞳も、小麦色の肌によく目立つ白い歯も、レッスンの生徒達の前では、誰もが好きになる弾けるような笑顔をつくるのに役立っているばかりだった。テニス雑誌が記載していた選手時代のプロフィールを信用すれば、身長が167センチで体重が61キロ。引退後二年が経過しても、まだじゅうぶんに筋肉質のアスリート体型であるのは間違いない。

長らく夢であったらしい常夏の島でのスキューバ・ダイビングを果たすため、インターネット上にある『南彩帆

航洋企画』のウェブを閲覧し、クルージングへの参加を決意したという。

堀部（ホリベ）夫妻の現住所は韓国・ソウルだ。

夫の雄馬（ユウマ・27歳）が現地のIT企業に転職した関係で移住しているのだが、妻の秀美（ヒデミ・26歳）の出自が日本人の父と韓国人の母をもつハーフであるということも、リクルートに影響を与えたのは言うまでもない。日本のIT産業が低迷を迎えた際、韓国企業の求人票を紹介したのも彼女だし、母の祖国の人脈もあり、社会的な慣習にも通じており、もちろん両国の言葉も堪能なので通訳もできる妻の存在なくして渡韓の決断は有り得なかった。結局その転身は吉と出て、まだ三十代前なのに、彼は日本にいたなら掴めなかったであろう抜擢と報酬を自分のものにすることが出来たのである。ウェブデザイナーとしての経歴もある秀美は、小柄で細面をストレートロングの黒髪で挟み、日頃は化粧もあまりしない物静かな印象であったが、泳ぎは得意じゃないと言いつつ、パラソルのつくる影の中、甲板の長椅子に俯せに寝て、透明感のある美肌をさらけだし、心地良い潮風にあたりながら微睡む彼女のビキニ姿は、とてもコンピュータばかり操って生活をしているとは想像できないほどのメリハリをもっていた。そこはやはりハイブリッドという人種性が要因となっているのだろうか。

ちなみに『秀美』は日本では『ヒデミ』と発音するわけだが、韓国でも女性名としてこの漢字を使い、『スミ』と発音する。堀部夫妻はソウルで働く時は『スミ』、日本で休暇を過ごす時は『ヒデミ』と呼んで使い分けているということだった。

二人は成功者としての初めてのバカンスをまず、冬のニュージーランドのスキーリゾートで存分に楽しみ、帰国の途中にここサイパンへ立ち寄って、今度はマリン・アクティヴィティで南国の日光を満喫するという、季節横断的な予定を組んで実行していたのだ。エスペランサ3世号の乗客となったのは、かの地に来てから偶然目にしたチラシの中の、無人島探検の項目に気まぐれの心を動かされたからなのらしい。

これらの夫妻達のエピソードは、クルーズ初日に用意された船長主催の夕食会の席上、問わず語りに話されたものである。幸子副船長が腕を揮ったという極上のフランス料理と特上のワイン、それに甲板に仕立てられたテーブルを吹き抜けていく洋上の海風、さらには聞き上手の船長の接待術・・・それらは彼らの心身を存分に解放させたのだろう。

翌日——つまり今日の午後——エスペランサ3世号は複数の改造プレジャーボートに群がって襲来した、およそ

十数名の海賊達によって、あっという間に占拠されてしまった。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

2. 絶対的リーダーの出現

「・・・まだこのまま一時間だなんて・・・」
暗闇の中、今後の希望を語った万田船長に対してようやく感想を述べたのは、ここでも元CAだった。

「うむ、さすがにそのくらいの時間をもらわないとどうしようもない。小さな潮目にでも遭遇すれば、潮流に逆らう形で進まなければならない場合もあるでしょうから」

「・・・だけど夫達はそろそろ限界が・・・」
奈々子は海中にかれこれ一時間半は入ったままの夫三人の体力を心配しているのだ。ディングーは日没が迫るにつれて約束通り速度を落ち着かせていたが、当初、自らも立ち泳ぎして船の推進力に貢献していた三人の下半身はさすがに疲れが見え始め、今はほとんどバタ足せずに伸びきり、船に引きずられるままになっていた。

「低体温症だって考えなくてはならないはずでしょう・・・」

「おっしゃる通りではあります。ただ海水温は高いですし、波をかぶることもなかったですから、まだまだ幸運は我々にある。それに槌谷さんのご主人はウエットスーツを着ていますので状況はより有利と言える」

万田の解説は理路整然としていて、どこか奈々子を論破するのを楽しんでいるようでもある。

「・・・そうですね。ウエットスーツを着ていればだいぶ違うでしょうけれど・・・」

しかし崇史も堀部雄馬もほとんど半ズボン一つの姿である。

「こうするのはどうかしら——」奈々子は胸に温めていた提案をした。「——私と夫を交代するというのはどうです。私が海に入り彼がボートに乗って休息する。三十分くらいしたらまた交代する。それを繰り返せば疲労も半分ずつになるでしょう」

秀美もそうだわそれがいいわと同意した。

綾音も万田の肩越しに声をかけてくる。

「ウエットスーツを着ればいいわ。私と船長が脱いで、海に入る人が着ればいい。この暗さなら真っ裸になったって見えっこないんだし」

『真っ裸』という単語を選んだ綾音の飾らない性格に、小さな笑い声が六人の間で起こった。

笑いに参加しなかった万田船長が慇懃に喋りだした。

「皆さんのサバイバルにかける積極的なご提案は痛み入るばかりです。これでこそ勝利を約束された運命共同体というものでしょう」

そこで一つ咳払いをする。

「ですので、船長としてそれらの提案に賛成しかねるのは残念で仕方がありませんぞ」

ともった希望の光がずっと消えていくように、六人は無言になる。

「海賊の追跡を100%不可能にし、大和撫子の素肌が真っ赤な火傷れになるのを防ぎ、この万田に精密な海図を提供してくれた、この夜の暗闇こそ、今度は皆様のご提案を不受理せざるを得ない理由となってしまうのは、何たる皮肉な巡り合わせでしょうか」

どうということですねと奈々子は静かに尋ねた。

「ご説明しましょう。まず、大海に浮かぶ小舟においては、海中の人を船上へ引き上げるのは昼間でも困難な作業であるという厳然とした事実があります」

「さっきは出来ましたよ。私達は這い上がった」

「ええ、たしかにおっしゃる通りです。先ほどは出来ました。それは経験豊富で鍛錬した肉体をもった私と、まだほとんど疲労していなかった皆さんとの共同作業であったから——それでもずいぶん運が良かった方です——成功したにすぎません。今度はひ弱な女手と疲れきった男

子のみでやらねばならない。私はここからでは手が貸せませんからね。成功の確率はゼロに等しいということです」

「席を交換して船長が船尾へ移動すればいいのでは」と綾音。

「転覆のリスクが高すぎますな。ボートの定員がなぜ設定されているかをお考えください。それ以上乗れば、設計上安全と基準される吃水の大きさが崩れ、ちょっとした揺れにも対応できなくなる。四人が乗ったこのボートでは僅かなバランスの乱れでも命取りになりかねない。よろしいですか、夜の海でディンギークラスのボートが転覆したら200%助かりません。全員が確実に溺死するのです」

綾音の嘆息が聴こえてきた。

「ウエットスーツの件ですが、これも許可できないでしょう。そもそも私のスーツはワンピースタイプなので、陸上でだって着脱が容易ではない。ここではむしろ不可能だ。槌谷夫人のはセパレートタイプだから上着だけなら何とか脱げるかもしれないが、それを海中の人間が着るなどとは曲芸のレベルの話になってしまう。もし仮に、船体から手を離して、ボートと人間との距離が2メートルついてしまえば、200%彼はもう戻って来られません。ボートの位置も漂流者の位置もこの闇では数秒でわからなくなる。定員オーバーのボートはまったく小

回りが効かないので救助には向かえない。他の多数のゲストの命を危険に晒してまで一人を助けようと海へ飛びこむ船長は、船長の職責を放棄したも同然です。そんなことをするくらいなら、そもそも最初から幸子を見殺しになどするわけもないのですから・・・」

貴方達のために、と、さすがにそこまでは口にしなかったが、六人全員の心にはそう聴こえていた。

「助けを呼ぶ彼の声だけは聴こえるでしょう。闇の中で、それを聴きながらまんじりともせず過ごす地獄をご夫人達は味わうことになる——」

「・・・やめてください・・・」

奈々子がたまらず万田を制した。

「そこまで言わなくとも・・・」

「失敬。最悪の可能性を指摘しただけですがご気分を害したかな。けれども過去に幾つも例のある話なので。リーダーの指示を無視し、統率を離れて軽挙妄動に走ればそうなると、肝に命じて欲しかったのです」

大丈夫ですよ三井の奥さん——そう声を振り絞ってきたのは雄馬であった。

波の揺れに声帯が震えているのが痛々しい。

「我々なら大丈夫です。あと一時間くらい、どうにかかりますよ」

「ゆ一君、喋らないで」秀美が夫の手を固く握りながら言う。

「そうだよ奈々子——」崇史も雄馬の言葉に同調する。

「——僕だって問題ない。ドキュメンタリーのロケに行けば、色んなことが起こるんだから。それをすべて乗り越えて今の僕があるんだからね。見くびってもらっちゃ困る」

しかし妻の耳には彼の声が十分前と比べても勢いの衰えがはっきりとわかった。

スーツを着て、有利といわれた浩一でさえも、この頃では得意のジョークも影を潜め、めっきり口数が減っている。

「船長、何か手立てはないのですか！」

奈々子の悲鳴に近い声が響き渡った。

「うむ——ようするに何かロープのような物があれば、それでご主人達の手や身体をボートに括り付けることが可能なわけだが。残念ながらディンギーにそんな用意はないですし」

「あるわっ」

秀美が食いついた。

「私のビキニを使えば出来ますよ！　ブラのストラップは完全な紐だし、パンツの穴に手を通せるわ！」

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

3. 分断された夫妻

X島は地殻変動によって取り残された珊瑚礁群等で出来ている。

大小の岩礁も付属しているが、ほぼ絶海の孤島だ。周囲約30キロ。普通に歩けば、三十～四十分で一周してしまう面積である。

標高はほとんどなく中央部へ向かって密茂していく南洋の樹木も数メートルが上限であった。

上空から写真を撮れば、湾を腹に持った半月形をしている。

しかし漁師達の天然港としての評価は低い。腹側は遠浅であるため漁船クラスでは近づけず、背側には岩礁が点在していてこれも接岸不可能という地形であるからだ。

この面積ではリゾート開発するのも無理であった。

誰からも注目されない小島として何世紀も過ごしてきたのだ。

『南彩帆航洋企画』では、数年前、地権者である北マリアナ諸島政府と交渉し、島の一部の使用許可を得た。遠浅の湾側は小型ボートで上陸するには適しているため、これを利用して『無人島探検』というクルーズのアトラクションを企画したのである。

事実、エスペランサ3世号は武装海賊に襲撃されなければ、このX島に向かっていたはずだった。テントや食料などを運びこみ一泊する予定を立てていたのである。第一次世界大戦前、この地域を統治していたドイツ軍が、この島に金銀財宝を隠したという有りもしない噂をロマンに仕立て上げ、ユーモアたっぷりに宣伝する万田船長に、ゲストの六人は大喜びでこれを楽しみにしていたのだった。

——そのX島に、まさかこんな形で訪れることになるうとは・・・。

何度も訪れ、周辺の地形を熟知しているとはいえ、闇夜の中、万田船長がディンギーをほとんど無傷のまま上陸させることに成功したのは、奇跡に近い離れ業だった。けれどもそれに拍手する余裕は六人には残されていなかった。

とくに男性達は低体温症と脱水症状とで意識が朦朧としており、妻三人も彼らを波のある海中から浜の奥まで速やかに運びあげるという悪戦苦闘の作業に残された体力を費やさねばならなかった。この時、万田は数時間に及ぶボート漕ぎ運動の疲労を理由にいっさい手助けしなかった。波打ち際に仁王立ちし、指示を出しただけである。それがサバイバルを成功に導く合理性なのだと改め

て強調した。

ついに執拗な波力から完全に脱出し、その届かない乾いた砂の斜面に全員が到達した途端、彼女達も力尽きて倒れこみ、川の字を二つ並べたように深い眠りに陥るしかなかった。

海賊の銃口に晒され、『板子一枚下は地獄』を文字通りいく遭難に瀕し、愛する者が藻掻き苦しむ姿を間近で眺めるのを長時間強いられた、このおよそ半日は、彼女達を昏倒させて当然だったのだ。

次の日、三人の妻達の中で最も早く目覚めたのは、三井奈々子であった。

人工ビーチのような白い砂浜に寄せる、耳鳴りな波音が覚醒する意識をまず迎えた。

昨日から引き続く青天はすでに正午に近い時間であることを示していた。

暑い――。

頭上の太陽が容赦なく照りつけている。

自分が何一つ遮るもののない砂浜に横たわっている事実を、ぼんやりと思いだした。

水着から剥きだした肌が音を立てて焼けているようだ。

奈々子はギクリとして身を起こした。

（崇史さんっ）

半死半生であった夫は隣で寝ているはずだった。

介抱せずに気を失っていたとは不覚である。

しかしそこに崇史の姿はなかった。

ぐると見回しても、いない。

それどころか男性は万田船長を含めて全員が姿を消しているではないか。

奈々子の隣には槌谷綾音が、その横には堀部秀美が、それぞれ露出している胸を無意識に防御するように、丸くなって眠っているだけだ。

「綾音さん！　秀美さん！」

砂のこびりついた二人の肩を激しく揺さぶる奈々子。

目を開いた二人は、しばらく不思議そうに奈々子を見上げるばかりだった。

何かに咬みつかれたように、二人は突如、跳ね起きた。砂地を掃きながら自分の夫の姿を探し求める。

「いないのよ誰も」と奈々子。

「いない——なぜ？」綾音は小麦色の顔をこわばらせる。「流されたってこと？」

「ちがうわ」立て膝をして海を眺める秀美が言った。

「この砂、全然濡れてないもの。波は来てないはずでしょう」

奈々子は彼女の肩に手を添える。

「そうね。それに昨日の様子では自分で動いてどうかなるってことも有り得ないし」

「じゃあ、どこへ？」

綾音が立ちあがると、二人も続く。

奈々子は身体中が傷んでいることに気づいた。そして頭もまだ揺れている気分である。

それは秀美も同じだった。綾音はさすがに足元がしっかりしている。

気づいたことはもうひとつあった。

奈々子の白ワンピースの水着だが、肩紐の一本が切れて右の乳房がこぼれ出ているのである。

おそらく上陸の際の死に物狂いと言っていい奮戦によって破損したのだろうと奈々子は推測した。

とても水着にかまっている場合ではなかったのだが、その状況は今も変わっていない。

何とかカップ部分を持ちあげて乳房を包もうとしたが無駄な努力だった。

青ビキニのパンツのみの秀美。ウエットスーツのズボンだけの綾音——しかしそれよりも夫達の安否が先だ。

「——あれは何かしら」

砂地と樹木帯との境界線を歩いていた綾音が指をさした。

その先10メートル、周囲をヤシの木で覆われた木造の小屋があった。

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

4 男根岩の英雄

行軍はしばらく続いた。

出発した上陸地点へ戻っているようではない。

それは何とか理解できたが、島のどこを移動しているのか見当もつかなかった。

樹木はジャングルと呼んでもおかしくない密度で、三人の視界さえ遮った。

パンティー一枚という最も露出度の多い姿の秀美が最初に音をあげた。

「・・・まだ・・・遠いですか、船長・・・」

「もうすぐですぞ。先ほどの小屋のあったビーチとは、ちょうど正反対の場所へ出ます」

「・・・そういえば・・・あの小屋には、ほかに衣裳の類は置いていないのですか・・・」

「パーティグッズ程度しかありませんからな。いつのことだったか、ねねがヤシの実のビキニでファイヤーダンスをするという出し物をやりましたけれど、あれが残っているかどうかでしょう。探してみても構いませんが、下品すぎて私は好きではなかったですな」

「・・・ヤシの実・・・」

それでもないよりはマシだろうか。秀美は首を振る。どんなものでも利用しなければならないのがサバイバルだ。

「小屋には——無線機とかはないのでしょうか？」

「残念ですが三井さんの奥さん、あそこに金目のものは置けないのです。海賊がすぐに盗んで行きますので」

「海賊・・・ここにも来るんですか」

「昨日のようなのは来ませんが、もっとケチな奴がね。空き巣専門みたいなのがいるわけですな」

なので水すらあそこには置けず、ほとんどが夫達の隔離施設に使っている、あの塹壕のような場所で厳重に保管しなくてはならない、と説明した。

「その空き巣専門の連中が来てくれればいいのに」と秀美が言った。「まとまったお金をやれば私達がここにいることをレスキューに連絡してくれるんじゃない？」

「これも残念だが秀美さん、空き巣は人がいないところに入るから空き巣なのです。我々のディンギーを見つければ近よりもせんでしょうな。コソ泥を信用するのは世界でも日本人だけの美德ですが——残念です」

秀美は一言もなく黙りこむしかない。

「それで船長——」奈々子が妻達の代表者のように尋ねる。「——正直な話、我々が救助される確率はどのくらいとお考えですか？」

「もちろん１００％です。ここまでのような皆さんの協

力が今後あれば、１００％、です。ただし、時期については・・・ちょっとわからない。不確定要素が多すぎますからな。明日かもしれないし一週間後かもしれない・・・」

万田は振り返りもせずに着実に前進している。

「幸子達と海賊の戦闘の結果次第というところもある。幸子達が彼らに打ち勝てば、おそらく幸子は一両日以内にエンジンを修理して、ディンギーが漂着する可能性の一番高い、このX島に真っ先にやってくるでしょう。あの女ならそのくらいのこと、簡単にやり遂げる力がある。この万田の妻ですから！」

彼は行手に飛びだしてくるヤシの枝を猛然と弾きあげた。その反動で他の枝も大きく揺れ、草露が後続の奈々子達の肌へ降りかかってきた。

「海賊が幸子達を制圧した場合——残念ながら客観的に言っても、五日から一週間程度で救援隊が来ると想定しています」

（一週間・・・）

そう呟きそうになって奈々子は慌てて口をつぐんだ。自分達の助かることばかりに気を取られ、幸子副船長らの犠牲について忘れた印象を与えてしまいそうだった。船長の感情を損ねるだろう。

（しかし一週間・・・）

すぐそのような気もするし、遙か彼方のような感覚もある。

「一週間は辛めの計算結果とお考えになってもらっていい。なぜなら今回のクルージングの詳細なスケジュールとコースは、ヨットハーバーのクラブハウスに書類にして提出してあるからです。エスペランサ3世号が予定される日時に帰港しなければ、速やかに調査が開始されるでしょう。目立った気象条件の悪化もなかったわけだから、航路の行程を、順を追って辿るオーソドックスな搜索手順が選択されるはずです。当然、このX島もスケジュールに記されており、いずれ搜索の手が伸びることになるのは必然だ」

想定外の運の悪さが幾つか重なったとしても、一週間がこの島に滞在するMAXの期間であろうと万田は断定するのだ。

「問題は夫達の容態よね」

綾音の息も乱れてきている。彼女が一番汗を掻いているように見えるのは浅黒い肌が原因だ。

「いかにもおっしゃる通りです、槌谷さんの奥さん。未開の地においては医療こそ最大の懸案です。医者はこちらにいるが医療体制はゼロに近い。されど、我々は我々の為すべきことを為すのみ。人事を尽くして天命を待つ。先ほど合意したように、彼らには可能な限りの栄養素を工面していこうではありませんか」

突如、森林帯が終わり、視界が開けた。

海だ。

島の反対側へ突き抜けたのだ。

そこは白い砂浜にはなっておらず、ゴツゴツとした岩場があり、それも落差数メートルの崖によってすぐに断ち切られ、波頭が打ちつけては木っ端微塵になるのを反復するという、ビーチとはやや異なる様相を呈していた。

「ご覧ください——」

万田に指摘されるまでもなく、三人は眼前の奇観に目を奪われていた。

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

4. 課せられたノルマ 托卵その一

ヤシの森を横断して、小屋へたどりついた万田は、さっそく火起こし用のキットを取りだしてきて、秀美に使い方を伝授した。

「休みたいところでしょうが、日没までには仕事を終わりたいのです。料理を隔離所まで運ばなくてはならないし。ご心配なく。肉体労働はすべてこの万田が引き受け

ます。なので、家事一般の単純労働は皆さんに分担して引き受けて頂きたわけですね」

「・・・ちっとも疲れてなんかいません。若いですから」

しかし彼女の身体も、万田ほどではないのにしろ、森を往復したせいで至る所に擦り傷をつくっていた。とくに豊満な双乳には土の汚れが目立っている。

秀美は砂地に青ビキニのパンティの尻を下ろし、キットを手にとった。

それは最も原始的な効率性の低い仕組みであった。

火きり板と呼ばれる物差しのような長方形の板を地面へ置き、両足裏で固定する。次に、火きり棒と呼ばれる長さ数十センチ・直径1センチの棒の先端を火きり板のV字の刻み穴へ差しこみ、両掌で挟んでキリモミするように高速回転させ、摩擦熱で火を起こすのである。

「日本でいえば縄文時代に用いられていた方法ですよ。煙が出てくるまでがけっこう大変です。そこから落ち葉などの火口に火を移し、種火をつくるわけです。まあ、動作としては単純このうえない、児戯に等しいものですから、誰にでもトライできる。あとは根性ですね」

「こういう細かな作業はわりと得意な方でしたから」

「じつは私もそう睨んでおりました——」なぜかゲラゲラと笑う万田船長。「——三井夫人や槌谷夫人では、御み足がすらりと長すぎて、最適な火起こしの姿勢をつく

り辛いという身体的難点がある。その他の適正を考え合わせても、秀美さんがこれにうってつけであるのは明白でしょうな」

「・・・」秀美はどういう表情をしていいのか困惑してしまう。

面と向かって、足が短いと言われているようなのは——相対的には事実なので——まだいいとして、『児戯に等しい単純労働』にふさわしい『その他の適正』とは一体なんだ？

あともうひとつ——

これは前々から気になっていたのだが、奈々子や綾音を呼ぶ際には『奥さん』とか『夫人』などというのに対し、こちらには『秀美さん』としか呼ばないのは、何か底意でもあるということなのだろうか。

「・・・えっと・・・？」

秀美が質問のための婉曲的な表現を思案していると、万田はいきなりリュックを開けて、そこから海鳥の死骸を取りだしてぶら下げた。首が折れ、目玉が飛びだし、血に濡れた凄惨な姿に秀美は吐く息を忘れて眉を吊りあげた。

「さて、私はこれの血を抜いて解体を済ましておきましょうか。ご主人達の本日の夕食は香ばしい焼き鳥になるわけです」

好感度アップ、期待しておりますぞ——今度は声を出さ

ずに笑いながら小屋の影へと歩いていく万田だった。

一方その頃、奈々子と綾音もまた苦戦を強いられていた。

まず、岩場には食べ物になりそうな生物がほとんど見つからないのだ。

船長は蟹やエビがいると紹介したが、そんな『大物』は気配すら感じられない。

せいぜいフナムシの一種と思われる黒光りした甲殻類が足元を走るのに出くわすくらいで、それすらあまりに動きが敏捷だから捕まえることが出来ないのである。

「フナムシなんて、そもそも食べられっこないんだから、こっちから願い下げよ」

伸ばした手をすり抜けられて、失敗を繰り返しては舌打ちする綾音はとうとう腹を立て始める。

「ここからでも泳いでいる魚が見えるのが癪よね・・・」

奈々子も徒労感漂う表情に苦笑を浮かべるしかない。水の美しさは想像を絶するくらいだが魚の運動能力はフナムシの比ではない。素人の二人が網もなく漁を成功させる見込みは皆無である。

一時間も右往左往してようやく回収できたのは、岸辺に流れ着いていたワカメのような海草と、大きな岩の海中に没している部分に大量に付着した、おそらくフジツボ

であろうシジミ大の魚介類のみである。
彼女達を悩ませているのは狩猟の困難さではなかった。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

6. 評価——綾音

彼女の次に綾音が万田の前に立った。

「喜んでくださっても構いませんぞ。海草を見つけたのもフジツボを見つけたのも貴方だ。評価が低かるうはすがない——」

さっそく船長の評価が開始される。

「なかなか勘がよろしいのでしょうか。洞察力が備わっている。いや、洞察力というより生命力とか生存本能といったほうが正しいのかもしれない。国際試合で揉まれた財産なのか。よく国同士のスポーツは戦争と言いますから、サバイバルにも応用可能な潜在能力がずいぶんとありそうだ。私のレクチャーを謹厳実直に励行すれば、好感度アップどころか、私の右腕にだってなれそうですぞ！」

綾音へのこれらの激賞が他の二人への暗黙のメッセージになっているのは明らかだろう。叱咤激励以上の煽動挑発だ。ウカウカしていると得点を独占されてしまうぞと――。

「今後はその鍛えられた身体能力を惜しまず発揮して戴けるなら、ここにいる全員は貴方に感謝するはず。そうなればサバイバルの成功も約束されたことになる」

そうだ。綾音にはアスレチックボディもある。ライバルにするには最強なのだ。

とくに秀美が鼻白んでいる。

もちろん綾音にその自負はない。万田の言葉には当惑するばかりである。当惑を過ぎて疑いすら大きくなる。彼の魂胆は何か――額面通りには受けとれるはずのない激賞だった。

「槌谷さんの奥さんの本日の評価は――4.8ポイントといたします！」

奈々子よりもわずかに高い数値が発表された。

万田は祝福のつもりなのか、満面の笑みだ。

それに対し、どういう表情をしていいか、ますます困る綾音。

奈々子と横目で視線を交わしながら、一応「ハアどうも」と軽く会釈してみたが、嵌り具合の悪い引き戸に手こずる気分だった。

万田は苦笑しながらボールペンを弄んだ。

「国際派のわりに、大和撫子の謙虚な表現力をお持ちのようだ。悪くはないがもっと澆刺と感謝の意思を表明してくださっていいのですぞ。もちろんこの万田船長にではなく、自然の恵みを与え、今日一日の生の全うを許したもうた神に向かってということですが」

「・・・現役時代から神頼みや願掛けはしない主義でしたので・・・」

「なるほど。リアリストでいらっしやったわけだ。まあ、他のお二人への気兼ねということもおありでしょう。すぐに弱肉強食を地で行けというのも無理がある。なので初日の今日は欠礼での減点は大目にみることにしましょう」

欠礼？ そんな評価項目もあるというのか。再び奈々子と視線を合わせる。暴君の鎧が見え隠れしてきた。

「どうも甘いな私は。もう二つも目こぼしをしてしまった」

独り言を呟きながら評定を書きこんでいた手帳を閉じる万田。

「ではスキンチェックを済ませてしまいましょう。日が完全に暮れないうちに」

奈々子と二人で何らかの意見表明をしたいところだったが、万田の言葉は人妻達の尻を叩く。夫達への栄養補給を第一義に思う感情の昂まりを促すのだ。

「スーツの下も脱ぎますか」

「そうですね。かえって中に入りこむのを好む習性がある。嫌な連中ですよ吸血動物とは」

綾音はもう踏ん切りをつけ、堂々とウエットスーツのズボンを下ろしていく。

アスリートの全裸には意表をつかれるような造形美があるものだ。

小麦色に焼けている腕や足や顔と、真っ白い部分——とくに胸乳や股間の対比は力強さと女性らしさが混在しているようで独特の雰囲気醸しだしている。

筋肉も衰えていない。

強い打球を跳ね返すラケットはこの腕や肩で自在に操るわけだ。

前後左右に素早く踏みこみ、走り、飛びあがる太腿やふくらはぎ。

すべての運動を支える腹筋と背筋。

どれも三十二歳の標準体脂肪率を拒否した精悍さを維持していた。

そのおかげで乳房の隆起は最小限に抑えられている。上下から圧迫された感じの微乳がアズキ色の乳頭を乗せて、ひと吸いで平らになってしまう程度、ふくらんでいくにすぎなかった。

激しいプレイのもたらす不測の事故に備えて、アンダーヘアは小さめにトリミングされている。しかしもともと草鞋型であったと思われるそれをやや雑に刈りこんだと

みられ、ワイルド感は拭えない。そういう諸問題に頓着しないさらった性格なのだろう。

「褐色肌の場合は見落としのリスクが高まるのでじっくりいかないと」

万田は秀美にそうアドバイスする。今回も身体の表側は彼女が担当させられた。

「では腋の下をどうぞ——」

そこの処理も股間と同様、おおらかといえた。二三カ所、剃り誤った傷が残っている。毛根も目立っていた。

「新陳代謝が早いのでしょうか一般的な人と比べると。おそらくエスペランサに乗船する直前に皆さん、処理されたと思うが、槌谷さんの奥さんはもう肉眼でわかるほど回復してきている」

「・・・っ」

「おっとこれは失礼。船暮らしのストレスを下ネタで解消するのは船員の文化というか特権というか・・・皆さんが大人の女性であることに甘えて、つつい封印していたものが出てしまいましたな。うん、この腋の下も異常なしと診断させていただきます」

海の男の世界の慣習がそのようなのは理解できなくはないのだが、毛深さを理由に、空気をリラックスさせる道化役にされるのは愉快的なことではない。それともまだ

『コンドーム事件』に対する皮肉を根に持っているのだろうか。

もう片方の腋の下も、肘をショートヘアの頭の上まで振りあげて完全に晒す。肩甲骨の辺りの筋肉がよじれる。前腕部が頬に密着するくらいだが、それ越しに、万田の顔面がすぐ迫ってきているのがわかって、綾音は全身の肌を撫でられるような戦慄き（わななき）を覚える。

「それにしても男性的な腋の下ですな。こうでなければ相手のコートに突き刺さるサーブやスマッシュは打てないのでしょう。いや見事なものです」

腋の下に男性も女性もあるのか？ 腕が太いと言いたいだけのようだ。

「では回れ右——」

綾音は万田へ背を向ける姿勢を取る。

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

7. 評定——秀美

「秀美さんも貴方なりの努力をしたことはまず認めなければなりません」

ただし——と重々しく続ける。評価すべきところはそれだけだと眼がはっきり言っている。

「それに高評価を与えるのは他のお二人の活躍に冷や水を浴びせるようなものでしょう。モチュペーションが低下する判断は厳に慎まねばならないのがリーダーの掟。ここは心を鬼にして公正中立な点数をつけさせてもらいますぞ」

「・・・はい・・・」

秀美は観念したようにポツリとってしまう。

それは二人きりの時に示された万田の『配慮』に、恩義を抱いていることの表明でもある。

ありがたい『配慮』をもらったのに返すことができなかった自分の無力ぶりを恥じる感情。

『配慮』が『押し貸し』に近いと疑っていたはずなのに、奈々子と綾音が帰ってきて成果を見せつけられ、船長の激賞を聞かされ続けるうち、現実はどんどん先に行き、疑っている暇はないのだという焦燥に支配されていたのだ。

暴君に操られた競争原理が走りだすと、枕営業を求めているかのようにも思った理性的判断すら消し飛んでしまうではないか。

——万田船長は次々に堀部秀美の『罪状』を読みあげた。

・夫である雄馬が前後不覚に陥った際に適切な対応を取れなかった。

- ・ 樹林帯を移動中、忍耐力が足りずすぐに弱音を吐いた。
- ・ プリックロックで船長が奮闘した最中、声援が最も小さかった。
- ・ 船長が岸边へ戻ってきた時、助けに駆けつけるのが遅かった。
- ・ 火を起こせなかった。（食料を探せなかったのと同罪）
- ・ スキンチェックの際、異常を見つけられなかった。

「えっ——」と声をあげたのは奈々子であった。「——最後のは？ 『異常を見つけられなかった』のではなく『異常がなかった』のでしょうか。それがどうして減点対象なのですか？」

「これは減点対象とはちがいます。ボーナス査定ですぞ。前にも言いましたが、健康管理は細心と勤勉を求めなければならない部分ですからな。もっと血眼になって探してもらわんとどうしようもない。アメとムチはやはり必要でしょう」

「でも・・・」

「三井さんの奥さん」と万田は奈々子を遮った。「評定に異議申し立てをできるのは本人のみとしませんか。でないと不正義の作為を策動する余地がでてくる。今のは専ら秀美さんのためを思った発言であろうけれども、そ

う装いながら評定を混乱に導き、喧嘩両成敗の相打ちを狙うような自爆テロだって理窟としては可能になってしまうのですぞ。そういう余地を残すのは得策ではありませんな」

「・・・」

奈々子はほぞを噛むしかなかった。万田が秀美に対し、より辛く当たっているような気がして助け舟を出そうと発言を求めたのだが、これではかえって彼の方針を強化する手伝いをしただけだ。

「とくに火起こしに失敗したのは残念でした。火は食料と同じ、生活の元素だ。これを操ればポイントが高いのは誰もが認めるところだったのに」

やれやれと首を振る万田。

「講習した万田の責任を痛感するところでもある。もっと情に流されず、手取り足取りスパルタ式で教えるほうが良かったのかもしれぬ。まあ、ほとんどの人間は三十分から一時間で達成できる技術なので、油断したところもあった。昨日から八面六臂の活躍を求められてきましたからな私も。つい判断力を鈍らせたのでしょう。これは万田の減点としても記録しなければなりませんぞ」

自分に非があるとしながら、信頼に応えられなかった彼女をさらに追いこんでいる言い回しでもある。

しかも最大の減点対象者が秀美であることに何ら変わりはない。

「貴方の本日の得点は——」万田は声を張りあげた。

「——2ポイントとさせていただきます！」

他の二人の半分以下の低評価となった。それが具体的にどういう差となって現れるのか、秀美は船長の眼の色をうかがって心配せざるを得ない。まさにこの男の自家薬籠中に収められつつあるのではないか。

万田船長は手帳を音を立てて閉じた。

「最下位者には、とくに明日への抱負を率先して宣言して頂きたい。挽回の決意を万感をこめて全員に周知する。貴方だけではなくそれを聞いたすべての人間が心を新たにもするだろう。劣等生の不撓不屈の気力ほどチームの団結を強める薬はないじゃありませんか！」

一種の罰ゲームである。もはや拒めるような空気ではない。巧妙に組み立てられた進行は迫力ある『万田節』によって鮮やかに仕上げられるわけだ。

「・・・あ、明日は頑張ります・・・」

秀美は狼狽えたように震えた声を発したが、万田は当然のように満足しなかった。

「ハハハ、臍から空気が抜けたような声ですぞ。秀美さん——」

そう明るく笑いながら二十六歳の平らな腹部を手の甲で軽く叩いた。

「ここに力を入れて、絞りだすように！ ハイもう一度！」

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

8. 評定——万田

その三人が細腕で運んできた適当な大きさの岩や石を組み合わせ、竈をつくると、さっそく調理が開始された。今日だけとは、秀美を横目で睨みながら前置きした万田は、オイルライターで薪に着火した。

飯ごうや鍋はあり、食器も幾つかある。

包丁の類はなかったが、船長が軍隊仕様の万能ナイフを持っていた。

それを器用に使って次々に貝の実を取りだし、海鳥の肉を切っていく。

料理の腕前も抜群であった。本格的に修行したのではないかと思われるほどの手際の良さである。

三人はただ砂浜に正座してみているだけだ。

まもなく魚介のスープと焼き鳥のディナーが完成した。

香ばしい肉の匂いが三人に忘れていた空腹感を思い起こさせた。

昨日、エスペランサ3世号でとったランチ以来、水以外

の食物らしい食物を胃に流しこんでいなかった。

三人の腹が順番に鳴っていくと、万田は大きく頷いて同情した。

「いや、ひとつも浅ましい現象ではないですぞ。マナーは餓える心配のない閑人が考えつくお遊戯ですからな。奥様方の品性に傷がつくなどということはないのです——ああ私は特別ですよ。鍛えてますし。伴侶が生きている奥様方と亡くした私との緊張感の差もありましょう」

表情にも生理現象にも、この男に飢餓感は微塵も現れていない。

演技とすれば、この夕餉の湯気の立ち昇りの前ではなかなかの玄人芸といえた。

「・・・ゆで卵は男性陣への基本栄養源としてキープすることにします。後ほど収容所へ運搬いたしますぞ」

プリックロックに営巣された海鳥の寝ぐらから、慎重かつ大胆に略取してきた卵は、主に先ほど降ったスコールの雨水を利用して、そのうちの四個だけをボイルしていた。残りはまだ十個弱、あるはずだったが、それらは明日以降に備えて貯蔵すべきであると万田は方針を発表した。

「焼き鳥は消化の問題もあって今夜は控えたほうが無難だが、海草のスープもあるし、この状況を考えれば、悪くない病人食と言えますぞ」

万田の言葉に続けて、奈々子が口を開いた。

「早く持って行ってあげたいわ。我々が食べるのは後回しにしてもいいのじゃありませんか」

それには綾音も秀美も同意した。これまでの奮戦苦闘はそのためであったのだ。

ニコリと微笑む万田。

「腹の虫も賑やかな奥様方にとっては、かなり踏ん張ったご提案ということでしょうな」

「・・・」

「夫へのそのご献身こそ妻の本分であるのはその通りでありますぞ。しかしそれは文明社会の内部での常識。我々が生き抜いていかねばならないこの辺境の真っ直中では、それも覆される。やはりサバイバルの原理を尊重せねばならんです。まったく働くことのなかった病人よりも先に、我々がその疲弊した活力を癒していくべきなのです。それでこそ、また順調に明日を迎えることが出来る。そうやって初めて、彼らの食料も新鮮に補給していけるのだから」

「・・・」

三人の意思はことごとく壁に打ち返される。

このサバイバルの現実には、夫の窮地という鎖と万田船長という超常現象が備わっていて、まったくもって敵わない感じなのであった。

元国際線CAも元国際級テニス選手も国内外で活躍する

ハーフ美女も、みなヤシの実で乳房を、腰ミノで尻を、粗末に隠した姿で、万田が砂の地面に並べていくプラスチックの四枚の皿を眺めるしかない。

「そういえば言い落としていましたが——」と万田は皿の隣にスープ用のマグカップを置いていきながら続けた。「——私の、この万田船長の本日の評価はといいますと——もちろん点数はありますとも。でなければフェアではない。まあ、評定人が自分の評定をするというのは困難だし、誤解を受けやすいが、他に方法がないのだから仕方がないでしょう。むろん、評価結果にご不満があれば異議申し立てを受けつけます。そうでないと信頼を頂けないでしょうからね」

そんな申し立てにどれだけ意味があるのか・・・三人は一縷の楽観も持てはしない。

「私、万田船長の本日の評価は、9.8ポイントとなっておりますのでどちら様もお含み置きください」二位の綾音が4.8ポイントだったから倍以上の差である。

彼の能力の高さは認めないわけにはいかないし、ここまでの実績も異議を差し挟む余地はない。

それは三人ともわかっている。

ただ、四つの皿へ取り分けられる焼き鳥の塊の個数が判明するにつれて、現実のあまりの酷薄さには呻かねばならなかった。

すでに万田の前の皿には4個の塊が乗せられていたが、綾音と奈々子のそれにはようやく1個であり、秀美の皿はまだ空のままであるのだ。

4個が8個になった時点で、1個は3個に、0個はなんとか1個へ、追加されたにすぎない。

スープのほうも似たようなもの。具の質と量が厳格なまでに傾斜配分されている。秀美のマグカップの中身は海藻の切れ端だけで貝はほとんど入っていなかった。

見かねた奈々子と綾音が、自分の分から少量ずつ配給してやろうとすると、万田船長は極めて申し訳なさそうに、しかし一切の妥協を拒む物言いで、それを禁止するのである。

「何度も説明する気はありませんぞ。ルールはルールなのです。競争はルールを守ってこそフェアであり定着できる。ちがいますか、槌谷さんの奥さん？」

「でも・・・」

「でしたらご主人用に確保している、このゆで卵——貴方が三人の中で一位だったボーナスとして総取りした権利ですがね——秀美さんへプレゼントしますか？」

「——」

「失敬。それはいささか極論過ぎましたか。しかし結局はみんなギリギリで生きていかねばなりません。一時の情に流されての全軍敗走は、人事を尽くして天命を待つサバイバルの極意に反している。この件での議論は今

後、取り扱わないということにいたしますっ」
最後にはやや声を強くして、万田はそう言い放った。
葬式のような食事が始まった。

以下は有料本編でお読みください。
#####